

因縁相應の梵文資料

——印度古塔出土の煉瓦銘文の内容比定——

平野 眞 完

パーリ Samyutta Nikaya の第十二 Nidana-Samyutta 及び、漢譯雜阿含卷十二(十四、十五)初め)の縁起を説く部分(椎尾辨匡博士國譯一切經阿含部一、二の分類による因縁相應)に對應する既刊の梵文資料⁽¹⁾の中、これまで十分に研究されていない次の三種の資料をとりあげ内容比定を試みる。

一、ゴーパールブル煉瓦銘文ⅡⅢ (E. H. Johnston: The Gopalpur Bricks, JRAS, 1938, pp. 547—553) 北インドの Gōra-klipur 地方の Gopalpur の古塔から発見された煉瓦に刻まれた梵文經典は、はじめ V. A. Smith と W. Hoey によつて報告され、第一の煉瓦の解讀が行われた(後記)。その後 Johnson は第二、第三の煉瓦を解讀して公表し、さきの Smith とホーエィの解讀に訂正を試みた。年代は Smith とホーエィは三・四世紀、Johnson は五〇〇年頃と推定する。

Johnson 公表の Brick II, III は一つの經典であるが、前と後の部分を缺く。縁起を主題とするが、初めを缺きテキ

ストは觸から始まり、觸から識まで、識から老死まで縁起を順觀する。思うに老死から識へと遡つて縁起を觀するのであらう。しかし逆觀では、老死から無明の滅へ、無明の滅から老死の滅へと觀する十二縁起となつてゐる。そして例えば

『その私にはこう思われた。何があるとき名色があるか。そしてまた何によつて名色があるか、と。その私の如理の思惟から、このよゝな如實の悟りがあつた。識があるとき名色がある。そしてまた識によつて名色がある』(IIA 5~7, JRAS, 1938, p. 551)

といふ表現から考えると、これは佛の成道の記述と考えられる。Johnson はこの經の類例を Lalitavistara XXII, 及び Buddhacarita XIV に求め、とくに後者では順觀が十支縁起、逆觀が十二縁起であることに注目した。しかし Buddhacarita は韻文であり、この銘文は散文である。更に銘文は『識があるとき名色がある。そしてまた識によつて名色がある』その私の思索は識の縁から還りそれから先に進

まなろ』(IIA 7~9, p. 551) というのがあるが、Buddhacarita (チャット文及び漢譯佛所行讀卷三)では、識と名色が相互に縁となる關係とする點でちがいががある。Lalivastara XXIIの成道の記事は順逆觀とも十二緣起である外、銘文と違つて一人稱を用いず bodhisattva の語を用いる。

パーリ資料には十支緣起成道説はあるが(D. xiv, S. xii. 65)、逆觀のみを十二緣起とする例はない。漢譯雜阿含の中で順觀十支、逆觀十二支で、かつ佛成道の回想の形式をもつて述べられる經は、卷十二(二七) (椎尾二六六城邑經)のみである。この經は緣起を觀じたあとに、譬えば人が曠野に古人の行つた道に遇ひ、その道を行つて古の城邑宮殿を見るように、自分は今仙人の道を得たというのであるが、その梵文斷簡(二葉)は既に S. Lévi が Nidāna-sūtra の名で公表した(JA. 1910. II, pp. 433—440)。兩者を對比させると Brick II B 8 (後半)~Brick III B 12 (p. 552. l. 2~p. 553. l. 27) の Nidāna-Sūtra Feuillet sr° 1~Feuillet ry° 2 (前半) (p. 438. l. 19~p. 440. l. 7) と殆ど同じである。しかし、レヴィ刊本は中間が缺けてゐるのび、順觀が十支緣起であるかどうか確かめられない(逆觀は十二緣起である)。また最近 Ch. Tripāṭhi の解讀公表した中亞發見の因緣相應梵文 Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta, Berlin 1962 の Sūtra 5: Nagara (=Nidāna) sūtra の一部 (S. 97-102) にこの銘文が對應するが、校訂者は

言及せず、又緣起順觀の末部 (S. 97-98) は寫本に缺けているが、單に十二緣起順逆觀と復元した。

パーリでは S. XII. 65 Nagaram (vol. II, pp. 104—107) が對比されるが十支緣起順逆觀である。漢譯增壹阿含卷三(三八・四)(大二、七一八上一下)もこの異本というが十二緣起順逆觀である。他の漢譯異本の支謙譯貝多樹下思惟十二因緣經(大十六、八二六中—八二七中)、玄奘譯緣起聖道經(大十六、八二七中—八二八下)、法賢譯佛說舊城喻經(大十六、八二九上—八三〇中)の三本は雜阿含(二八七)及び本銘文と同じく、順觀は十支緣起、逆觀が十二緣起である。この中舊城喻經と貝多樹下思惟十二因緣經とは識と名色の相依を説き、この銘文と異なる。その點でも雜阿含(二八七)と緣起聖道經がこの銘文と一致を示す。なお前者では緣起を述べると中間(有から六入處まで)を簡略に記すのび、省略なしに記されるこの銘文は玄奘譯緣起聖道經と最もよく符合する。

ii) **コーパールプル煉瓦銘文 I** (V. A. Smith and W. Hoey: Buddhist Sūtras inscribed on Bricks found at Gopālpur in the Gorakhpur District, Proc. Asiatic Society of Bengal, 1896 pp. 99—103) この brick I は表裏で完結した一經であり、諸法の集成 *acaya* と滅亡 *apacaya* としつゝ、無明から老死へと十二緣起の順逆觀を述べる。

この銘文の相當經としてパーリ S. XII. 1 Desana (vol. II,

pp. 1-2) がジュンストンによつても指摘されており、無明から老死へと十二縁起順逆觀を端的に述べる點では互に一致する。しかし、*acaya*, *apacaya* の語はパーリになく、また *imasmim sati idam bhavati asya utpādād idam utpadyate* の文はパーリにない。漢譯としては、雜阿含卷十二(二九八)(椎尾二三三法說義說經)が類例と考えられていた。その始めの『此有故彼有、此起故彼起、謂緣無明行、乃至純大苦聚集』(大二、八五上)の文のみは、この銘文の前半と一致するが、この經はこの銘文とは異なつて次に無明乃至老死の註釋を述べ、また逆觀を説かず、説處をも異にする。

この銘文は雜阿含卷十四(三五八)(椎尾二六六無明增經)に對比すべきものと考えられる。その經には『増法・減法』として十二縁起の順觀と逆觀を配するもので、銘文と殆どよく一致する。この『増法・減法』は銘文の『諸法の *acaya*, *apacaya*』に内容上對應し、次の『……集法・減法如上說』と略記する集法、減法は *acaya*, *apacaya* の語に對應する。さすればせよ、この銘文はパーリ S. XII. 1 を雜阿含(二九八)よりも、雜阿含(三五八)によりよく一致するのである。

なお雜阿含(三五八)をパーリ S. XII. 35-36 *Avijjāpacaya* に對比するのは誤りである。また同種の銘文が *Kasia* 發見の銅板(*Archaeological Survey of India, Annual Report, 1910-11, pp. 76 ff.* 但し未見)にも刻まれている。

三、ナーランダール煉瓦銘文(N. P. Chakravarti: Two Brick

Inscriptions from Nalanda, Ep. Ind. XXI, 1932, No. 32, pp. 193-199) これはチャクラヴァルティによつて解讀され、P. C. Bagchi の研究が附せられている。この年代は五百年位とされている。このテキストは後に N. Aiyaswami Sastri が彼の稲芋經出版の中にチベット譯と共に出版した(*Ārya Saṅgastamba Sūtra*, Adyar Library No. 76, 1950)。また未見であるが、この經の梵文銘文断片が燉煌附近に發見され、V. V. Gokhale の研究がある(聞く(A *Brahmi Stone Inscription from Tunhuang, Sino-Indian Studies, I pp. 19 ff.*)。)

この銘文は『縁起の初め *adi* と分別 *vibhanga*』を説く完全なテキストであり、『初め』とは『これあるとき彼あり、この發生より彼發生す』といつて無明より老死にいたる十二縁起順觀をあげ、『分別』とは無明乃至老死の各々を註釋する。これは玄奘譯縁起經(大二、五四七中—五四八上)及びチベット譯 *rtin-cin-hbre-l-bar-hbyun-ba dan-po dan nnam-par-dbye-ba bstan-pa shes-bya-bahi mdo* (東北目錄 No. 211 影印北京版三四卷 No. 877) とに逐語的によく一致する。チャクラヴァルティはこの銘文(の分別の部分)を S. XII. 2 *Vibhanga* に對比させたが、B. C. Law はパーリ論藏の分別論 *Vibhanga* の縁起を説く部分(第六品縁行相分別)に類例を求めた(*Formation of Pratyasamupāda*, JRAS, 1937 pp. 287 ff.)。S. XII.

はこの銘文とは愛(パーリは六愛身、銘文では三愛)、受(パーリは六受身、銘文では三受)、無明(銘文の方が詳しい)などの説明で異なるが、パーリ分別論ではこれに加えて更に異なる點(行については銘文は三行、分別論は六行、有については銘文は三有、分別論は二有、その外分別論では『悲しみ』以下の註をも含む)もあつて、分別論よりも S. XII. 2 の方がこの銘文にちかい。

S. XII. 2 に相當するのは雜阿含卷二二(二九八)(椎尾一一八七二法說義說經)である。緣起支の説明の全部及び記述の順序などについて、この銘文は(玄奘譯緣起經及びチベット譯東北 No. 211 と共に)雜阿含(二九八)と一致を示す。

尙 Tripāṭi 公刊の因緣相應梵文の第十六 *Adi-sūtra* (S. 157-164) がこの經であり、經の始めと終り及び十一緣起の定型句とに省略がある外は、この銘文と符合する。

四、因緣相應の構成と梵文資料 以上の三銘文が雜阿含因緣相應の經典に對應するのを見たが、因緣相應の梵文資料の外にも、古塔出土の緣起を説く偈の梵巴の銘文など、緣起の資料は處々に比較的多く發見されてきた。

さて最後に因緣相應の構成についてふれてみよう。パーリ *Nidāna Saṃyutta* の各經(九三經)は殆ど大部分雜阿含卷十二¹⁾、十四²⁾、十五(はじめ)(即ち椎尾博士の因緣相應)にのみあらわれる。また E. Waldschmidt & Tripāṭi が公表した梵文資料³⁾によつてみると、その資料は雜阿含の原本の構成に近く

順序も同じことが知られ、またその梵文資料は卷十二から十四に續くとした椎尾博士の見解を支持する。經の順序についてみると、漢譯とパーリとの間では非常に異なり、わずかに二經程度順序の一定したものがあつたにしても、兩者の間には經の順序の上では一貫したものがない。因緣相應に含まれる經典のあるものには、雜阿含の外にも異譯異本があり、そして主に異譯異本のある經の梵文が銘文や寫本の中に發見されたのである。内容については、すでに中央アジア發見の梵文資料はパーリよりも漢譯雜阿含により近いといわれていたが、最近公表された中央アジア將來の梵文資料でも、いま見たインド發見の梵文銘文でも同じことがいえる。

1 Waldschmidt: Identifizierung einer Handschrift des *Nidānasamyukta* aus den *Turfanfunden*. ZDMG. 107. 1957. S. 272-401. *Sūtra 25 of the Nidānasamyukta*. BSOAS. vol. 10. 1957. pp. 569-579. Ein Fragment des *Samyuktāgama* aus den „*Turfan-Funden*“ (M 476). NAWG. 1956. Nr. 3. S. 45-53 この外は本文に指摘した。2 世親の註東北目録 3995 あり、同梵文は G. Tucci が公刊した (RAS, 1930. pp. 611-623)。また徳慧の復註東北目録 3996 もある。3 玄奘譯緣起經を増臺阿含四九・一、雜阿含二四八、羅什譯放牛經と對比するの誤りである。4 Maung Tun Hyein: *Maunggun Gold plates*, Ep. Ind. V. 1898-99. pp. 101-2, Sten Korow: *Two Buddhist Inscriptions from Sannah*, Ep. Ind. IX. 1907-8. pp. 291-3, V. V. Vidyavinoda: *Two Inscriptions from Both-Gaya*, Ep. Ind. XII. 1913. pp. 27-29.